平成10年（1998年）9月10日発行　第221号　（昭和59年10月1日第三種郵便物認可）

教皇様の聲 9 221号

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 ©1998

聖書の豊かさをすべての人に！

「祭りの終わりのもっとも盛大な日に、イエズスは立ち上がって大声で、『渇く者があれば私のもとに来て飲むがよい、私を信じる者は、聖書の言葉にあるとおり、生きる水の川がその内から流れ出るだろう』と言われた。イエズスは自分を信じる人々が受けるはずの霊について話されたわけである。」（ヨハネ７・37～39）

（…）皆さんの会議は、「聖書を通じてイエズス・キリストと出会う」という大きなテーマを掲げています。使徒的書簡『紀元二千年の到来』の中で私は、「神の言葉に満ちた典礼により、あるいは信心をもって朗読することにより、あるいはそのためにふさわしい講座やその他の方法によって、キリスト者は心を新たにして聖書に返るべき」（40番）であることを強調しました。

聖書には、愛に満ちた神の救いの計画が読み取れる

第二バチカン公会議によって、聖書研究と信者の共同体での聖書を通じた使徒職に大きな弾みがついたにも関わらず、いまだにあまりにも多くの信者が聖書との生きた触れ合いを失い、啓示された書物の中にある神の言葉の豊かさを通して信仰を養う機会がありません。この人たちにもっと聖書に接してもらうため、一層の努力が必要です。「聖書を知らないのは、つまりはキリストを知らないことだ」と聖ヒエロニムスは言いました。聖書の全てがキリストについて語っているからです。（ルカ24・27参照）

本当に聖書に接するには、公会議の「神の啓示に関する教義憲章」を見るのが一番です。そこには教えの根本と、最も適切な司牧の方法が述べられています。聖書を読むことは神の言葉に耳を傾けることに他なりません。それは聖書研究の正しいアプローチ方法であり、霊的生活の源となります。聖書はあらゆる司牧活動を促し、活気づけ、キリスト教一致のための対話を導き、支えます。聖書は人間的にも文化的にもすばらしい宝庫であり、多くの国々ですぐれた文明を生み出しました。

このような信仰と文化のつながりのため、キリスト教入門の要理教育や学校でのカトリック宗教教育において、聖書は新世代の形成の基礎的教科書とされています。

新たな福音宣教の重要な課題の一つは、典礼や説教、要理教育、聖務日課（教会の祈り）などを通じてもう一度聖書を神の民全員に指し示すことです。小教区や修道会、信徒の運動や団体、家庭や若者たちは、こうして愛に満ちた父なる神の謙遜を目のあたりにすることができるでしょう。神の愛は聖書を通じて全ての人に伝わり、神の御独り子と、人間に対する救いの計画を明らかにしてくれます。

信仰はわざに表われるべき

信者が聖書の内容の深さと真理をくまなく理解し、信仰の最も大切な規範として受け入れるためには、当然ながら手引きが必要です。その手引きは、表面をなぞったものや感情に流されたものであってはなりませんし、賢明な目で吟味されていなかったり、聖霊をなおざりにした解釈を施されたものであってもなりません。これは特に私たち司牧者の責任です。それには司祭や要理教育者の助けが必要です。まことの真正な聖書本文の解釈と伝達は、生きた聖伝の光に照らされ教導職の指導のもとにある教会内においてのみ、可能です。（神の啓示に関する教義憲章10番参照）

聖書を通してイエズス・キリストに出会うことを熱望する皆さんは、神のみことばが託身されてから二千年目の特別な聖年を祝うための準備に、大きく貢献しておられます。それぞれの教会で、また司教団全体として、この大きな祝典に備えておられる皆さんの努力を喜ばしく思います。

（…）皆さんが実行に移すべく力を注いでおられるのは、霊的生活の重要性、新たな福音宣教への取り組み、信仰と文化の関わり、家庭、若者たち、貧しい人々の優先、政治や社会にキリスト教の息吹を送ること、などです。

特に、文化をキリスト教に方向づけることは、注意深く協力し合って達成すべき目標です。わざに表われた信仰とは、このことです。国の将来のため、世の事柄に携わる信者たちを、過去においてもそうだったように、キリストも励まし、助けてくださるでしょう。社会の通信や報道の分野にキリスト教信仰を導入しようとする皆さんの真摯で組織だった努力を激励したいと思います。周知のとおり、この分野には急を要する難問が待ち構えているからです。

家庭を守るために適切な法を

（…）家庭に始まる種々の中間団体から生じてくる、「社会の主体性」（『新しい課題』13番参照）を尊重し、促進しなければなりません。中でも家庭は、社会と教会の基本的な細胞であり、とても大切です。ここイタリアにおいてさえ、家庭が多くの攻撃にさらされていることを考え、皆さんが家庭を対象に行なっている司牧活動を支持します。また、結婚に基づく家庭の権利を法律で守り、家庭と母性が不当な扱いを受けないよう、税制や雇用に関する提案を行なうカトリック信者と全ての善意の人々の取り組みを支持します。（…）

（97・5・22、イタリア司教総会でのお話）

教育者のみなさんへ

敬愛する皆さん。

カトリック教育協会の皆さん、お会いできて光栄に思います。皆さんは教育という重大なテーマについて考える機会を私に与えてくださいました。

（…）「教育の可能性」は、疑いもなく人間を特徴づける次元であり、人間の精神の豊かさを強調しています。人間が限りなく自らを改善できるのも、そのためです。今回は教育者の方々のみならず、教育理論に携わる方々にもお話しする機会を得ましたので、複雑多岐なテーマのうち、あまり注目を浴びていないが、個人の生涯において大きな重要性を帯びる局面に目を向けてみたいと思います。

皆さんと共に考えてみたいのは、教育というデリケートな問題について研究する上での複雑さです。皆さんには、定義は困難ですが独自の厳密な研究方法があります。それらを一言で正確に言い表わせば、「真剣さ」ということになりましょうか。教育という分野の研究は、本腰を入れてかからなければなりません。単に方法が正しく、分析が徹底していて、資料が信頼できればそれで良しというわけには行かないのです。本腰を入れるとは、結局、皆さんの分野で使える方法を、個人的に責任感と良心をもって用いるということです。

少し考えればわかることですが、皆さんの仕事の実際的な成果を見るためには、制限時間を設けることはできません。かんばしくない結果が出れば、残念ながらすぐに取り戻せるというものではありませんし、明るい成果は、変わりやすい要素が一通り落ち着いてからやっと現われるように見えます。これらたくさんの未知の要素を参考に、このような複雑な分野を研究する人々にはことさら「真剣さ」が要求されることを見落としてはなりません。

対象が人間であり、時代に対応した価値・歴史を通じて変わらぬ価値を合わせ持つ存在ですから、人間の秘義にふさわしい研究方法を選ぶことが何よりも大切です。それは、超越性に向けて自らを開く可能性を秘めた人間精神をくまなく解き明かすことができる方法でなければなりません。

真剣な研究とは、数値に振り回されたり、人間という対象には不適切な科学的方法を持ち込んだりする誘惑を退けることでもあります。人間について、あるいは人間の能力開発について研究するなら、周囲のどんな状況に妨げられようと、理想を下げてはなりません。手っ取り早い方法で、レベルを下げるようなことをしてはなりません。

さらに、人を研究する前に、自分自身を人間として完成させる努力をするべきです。皆さんの研究は孤立したものではありません。大学を構成する教授や学生たちの間で発表され、存在します。学術機関が最初に設けられた時、教育の課程としてユニークな相互作用の形が考え出されました。それは、教師の人間性をも含めた信頼性を試すもので、学生には教師が体現する価値観や理想を見つけだす機会を与えてくれます。

理論研究に専念する人も、教育という使命に実際に携わる人も、人間としての模範を掲げるよう心掛けなければなりません。人間性の輝きを備え、社会の中で、自分の教養よりも先に、生活の証しをもって人々を自己の完成に招く人とならなければなりません。

教育者の努力を妨げる二つの大きな要因があります。まず、はかない成功を求めるという危

険。これがふさわしくないことであると言うのなら、人間の真実に関わる場合やその生と死、喜びと悲しみに関わる場合にはなおさらです。便宜主義的な容認や実用本位な適用は絶対に許されません。人間を研究するということは、それ自体が聖なるもので、いかなる搾取・濫用をも認めることはできません。

注意して避けねばならないもう一つの危険とは、致命的とも言うべき「力」への誘惑です。力に魅せられ目がくらんでいたなら、心の目を開いて人間の真の価値を認め、その神秘的な聖性に敬意を払うことは不可能です。おわかりでしょうが、人間に近づくためには真に「仕える」精神が必要です。しかし、人間に仕えることと、力の奴隷になることとは両立しません。力を求めたら最後、人は自分の存在が個人と共同体の生活の質を高めるために役立つことを願う存在であると言いながら、人間の存在を無視する破目に陥ります。

皆さん、人間に対する心を込めた奉仕、心に抱く計画を実現させるための日々の努力は、困難で時には敬遠したくなるような使命です。でもそれは、人間の中にある永遠なるものを正しく発展させるための道でもあります。教育という仕事はつねに要求されることが多く、つらく厳しい務めです。ですからこの分野を研究目標に定め、この仕事を選んだという事実は、高貴な献身であり、最高の評価に値します。この機会に私からの大いなる感謝を表し、困難に負けず堅忍されるよう、皆さんに心からの激励をお送りしたいと思います。必要な天の助けが欠けることのないよう、皆さんのためにお祈りします。皆さんと、皆さんが教え導いている全ての人々に、特別の祝福を送ります。

（98・4・18）

聖霊降臨は新しい契約の実現

聖霊シリーズ　8

1　キリストの十字架と復活から成る過越が絶頂を迎えたのは、エルサレムでの聖霊降臨の時でした。高間に集まっていた使徒たち、マリア、キリストに従った人々から成る最初の共同体の上に降り注いだ聖霊は、イエズスが弟子たちに約束し、宣言されたことの実現だったのです。聖霊降臨は、「キリストの御血において」神と人との新しい契約が成立したことを公に告げました。「これは私の血による新しい契約である」とイエズスは最後の晩餐の席上で言っておられたのです。（Iコリント11・25参照）　これは新しい決定的な、永遠の契約です。これに先立つのが旧約聖書の語る契約で、新しい契約を準備するものとなりました。実際、すでにこれらは、神がキリストと聖霊において人間と交わされた決定的な約束を宣言しています。エゼキエルの預言に見える啓示は、聖霊降臨の出来事をこの光に照らして見るようにとの勧めです。「私はおまえたちの上に霊をおこう。」（エゼキエル36・27）

神とノア、アブラハムとの契約

2　以前にも触れましたが、五旬祭はかつて収穫の祭りでした。（脱出の書23・14）　後に、エジプトでの苦役から解放されたイスラエルと神との間の契約を記念すると共に、言わば更新する祭りにもなりました。脱出の書には、事あるごとにモーゼが「契約の書を開き、民に読んで聞かせた」場面が見られます。民は「われわれは、主の仰せられたことをすべて守り、それに従います」と答えました。モーゼは牛の血を民の上に注ぎ、「これは、みことばにもとづいて、主がおまえたちとむすばれた契約の血である」と言いました。（脱出24・7～8）

3　シナイ山での契約は、主なる神とイスラエルの間に結ばれました。それ以前には、聖書によれば、神と族長ノア、およびアブラハムとの契約がありました。

洪水のあとノアと結んだ契約では、神は人間だけでなく、目に見える世界のあらゆる被造物との間に契約を結ぶ意図をお示しになりました。「おまえたちと、そのあとを継ぐ子孫と、ともにいるすべての生き物、…箱船を出た全ての生き物と、私は契約を結ぶ。」（創世9・9～10）

アブラハムとの契約では、別の意味が加わります。神は一人の人を選び、彼とその子孫と契約を結びます。「私はおまえと、おまえの跡を継ぐ代々の子孫との間に、契約を定める。それは永遠の契約である。こうして、私はおまえの神、おまえの跡を継ぐ子孫の神となる。」（創世17・7）　アブラハムとの契約は、まず一つの民イスラエルを選び、その民の中から約束の救い主が生まれるという神のご計画を表わしています。

シナイ山の契約は神の法を与えた

4　アブラハムとの契約は、本当の意味での法とは言えません。神の法は後にシナイ山の契約で与えられます。神はモーゼを山の上に呼び、法を与えることを約束されました。「おまえたちが私の言うことを聞き、契約を守るなら、すべての民の中で、おまえたちは特に私の心にかけるものとなる。地はことごとく私のものである。…おまえがイスラエルの民に聞かせねばならないのは、このことばである。」（脱出19・

5）　モーゼは民のかしらたちに神の約束を告げました。「民はこぞってこう答えた。〈われわれは、主が仰せられたとおりにします。〉　モーゼは、この民のことばを主に伝えた。」（同19・8）

聖書に描かれた、契約を受ける場面とモーゼの仲介者としての行動を見ると、イスラエルの指導者・法を与える者としての彼の偉大さが浮き彫りになります。モーゼが民に与えた法が神に由来することも示されていますが、同時に、シナイ山の契約が神と民の双方に義務を負わせるものであることを理解すべきでしょう。主はイスラエルを選んで特別にご自分のものとされ、「祭司の国、聖別された民」（脱出19・6）となさいましたが、民の方はその条件として、十戒に示された神の法と他の掟や規定に忠実を保たねばなりません。イスラエルの民は、このような忠誠を誓ったのです。

5　旧約時代の歴史を見ていくと、イスラエルは何度も神に対して不忠実になります。預言者たちはイスラエルの不忠実を咎め、山ほどある歴史上の出来事を天罰として指し示しました。預言者たちは、さらに罰が下るだろうと脅しましたが、同時に新たな契約をも告げました。たとえばエレミアの書には、「私がイスラエルの家とユダの家に新しい契約を結ぶ日がくる―主のお告げ―。彼らの手を取ってエジプトの地から連れだした時、先祖と結んだ契約とは違う契約である。私は主であったのに、彼らはその契約を破った。」（31・31～32）

未来の新しい契約は、人間とさらに親密なものになります。再びエレミアです。「その日ののち―主のお告げ―私がイスラエルの家と結ぶ契約はこれである。私は、民の奥深くに私の律法を置き、その心に記す。私は彼らの神となり、彼らは私の民となる。（31・33）」

神のこの新たなご計画は、特に「内なる」人間に向けられたものです。神の法は人間「存在」の奥深く（人間の「自我」）に「置かれ」ます。こうした内的な性質は、「その心に記す」という言葉で裏書きされています。つまりこの法は、人間が何者であるかを内的に示すのです。こうして初めて神は真実「彼らの」神となります。

6　預言者イザヤによると、新しい契約のもととなる掟は、神の霊によって人間の霊魂に刻まれます。実に、「エッセの株から新芽が出、その上に主の霊が宿る。」（イザヤ11・1）　つまりメシアの上に。預言者の言葉は彼において成就します。「神なる主の霊は私の上にある。主は私に油を注がれた。」（イザヤ61・1）　神の霊に導かれたメシアは、契約を成就してそれを「新しい」「永遠の」契約に変えるでしょう。これが、歴史の浮き沈みの中でイザヤが予言したことです。「これは、私が彼らと立てた契約であると主は言われる。おまえの中にある私の霊と、おまえの口に置いたことばは、おまえ自身の口と子孫の口から、また子孫の子孫の口から、代々に消えることはないと主は言われる。」（イザヤ59・21）

7　イザヤの預言がどの時代を指しているにせよ、その言葉がキリストにおいて、彼「自身の」ものであると共に彼を遣わされた御父のものである（ヨハネ5・37）みことばにおいて、余すところなく成就したと言ってもよいでしょう。法を新しく生まれ変わったものとして完成させた福音において、またキリストの十字架と復活を通してもたらされた聖霊において、神が旧約の預言者たちを通じて告げておられたことが成就します。キリストと共に、聖霊において新しい契約があります。預言者エゼキエルが神の代理として預言したように、「私はおまえたちに新しい心を与え、新しい魂を置き、その体から石の心を取り除き肉の心を与えよう。私はおまえたちのうちに霊を置き、私の掟に従わせ、定めを守らせ、行なわせよう。…私の民とし、私はおまえたちの神となる。」（エゼキエル36・26～28）

8　「上から下った贈り物」（ヤコボ1・17参照）の最高の瞬間であるエルサレムでの聖霊降臨によって、神が人間と結び、御独り子の「血において」保障された契約がついに成就しました。その契約では三位一体の神が、もはや選ばれた民のみならず、全人類に「ご自分をお与えに」なります。エゼキエルの預言「私の民とし、私はおまえたちの神となる」（36・28）が、新たに普遍性という決定的な次元を持ちます。内面性という次元も実現します。贈り物―聖霊―が全ての人の心を満たし、あらゆる罪や弱さを克服する力を与えてくれるからです。また、永遠性という次元も獲得します。それは「新しい永遠の」契約（ヘブライ13・20参照）です。あふれる賜物のうちに、教会は新しい永遠の契約による神の民として出発しました。こうして聖霊についてのイエズスの約束「他の弁護者をあなたたちに与え、永遠に共にいさせてくださる」（ヨハネ14・16）が成就したのです。

「教皇様の聲」　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙
■毎月10日発行　■定価：送料とも一部186円　■年内定期購読：送料とも一部2,087円
詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人■精道教育促進協会　〒659-0093兵庫県芦屋市船戸町12-6　TEL. 0797-31-3452・FAX. 0797-31-3448